

# 『千金方』——遣唐使将来本の書写について

松岡 尚則<sup>1)</sup>, 山下 幸一<sup>2)</sup>, 栗林 秀樹<sup>3)</sup>  
牧角 和宏<sup>4)</sup>, 山口 秀敏<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup>静岡県立こども病院外科, <sup>2)</sup>高知大学医学部麻酔・救急・災害医学  
<sup>3)</sup>越谷大袋クリニック, <sup>4)</sup>牧角内科クリニック, <sup>5)</sup>信州医療福祉専門学校

受付:平成19年11月28日/受理:平成20年4月24日

**要旨:** 宮内庁書陵部所蔵の古鈔本『千金方』——遣唐使将来本を検討し、文字が裏表逆にして貼られた部分を発見した。この鏡文字となった部分を反転したところ、「隅醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向」と書かれていた。これを解析し、『千金方』——遣唐使将来本は通常とられる順方向から写すことはせず、初めから写し遺すことを目的に左側より書写されていたことが判明した。遣唐使将来本の書写はできるだけ本来の形を遺そうとして、現存の遣唐使将来本が残ったものと考えられた。また、遣唐使将来本は、草稿本に近い書である可能性があると考えられた。

**キーワード:** 千金方, 『千金方』——遣唐使将来本, 宋改, 書写

## 緒 言

宋改を経していない千金方には、『千金方』——遣唐使将来本、『新雕孫真人千金方』、イギリスの『スタイン本』、ロシアの『コズロフ本』の4系統が知られている。現在、世に広まっている千金方は、北宋の1066年に校正医書局が統一・改訂して刊行された宋改本といわれるものである<sup>1)~6)</sup>。このうち、『千金方』——遣唐使将来本(図1)、『新雕孫真人千金方』は日本に現存している。『千金方』——遣唐使将来本は宋改以前の唐代旧態本であり、895年頃の『日本国見在書目録』に著録され、984年の『医心方』ほかに引用される『千金方』が本系統に属する<sup>2)</sup>。宮内庁書陵部所蔵の古鈔本『千金方』——遣唐使将来本を検討し、文字が裏表逆にして貼られた部分を発見した。この部分と『千金方』——遣唐使将来本に特徴的な部分を検討したので報告する。

## 方 法

宮内庁書陵部を訪問し、『千金方』——遣唐使将

来本(五五八函九号)を使用し検討した。

## 結 果

『千金方』——遣唐使将来本の最後に、文字が裏表逆にして貼られた部分(図2)を認めた。この頁はオリエン特出版版でも『真本千金方』でも掲載されていない頁であった。この鏡文字となった部分を反転(図3)したところ、右隅に、「隅醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向」と書かれていた。また、『千金方』——遣唐使将来本の特徴として「穴アリ」との記述があり、有の文字に×を入れた部分が見られた。

## 考 察

『千金方』は、遣唐使(630-894)によってもたらされたと考えられている。『千金方』の存在を示す最初の記録は、藤原佐世の『日本国見在書目録』(891-897)において、医方家の項166部のうちに「千金方卅一 ===抄一」とあり、目次を含め、三十一巻が存在したのと考えられている。

『千金方』——遣唐使将来本は縦29.3 cm横

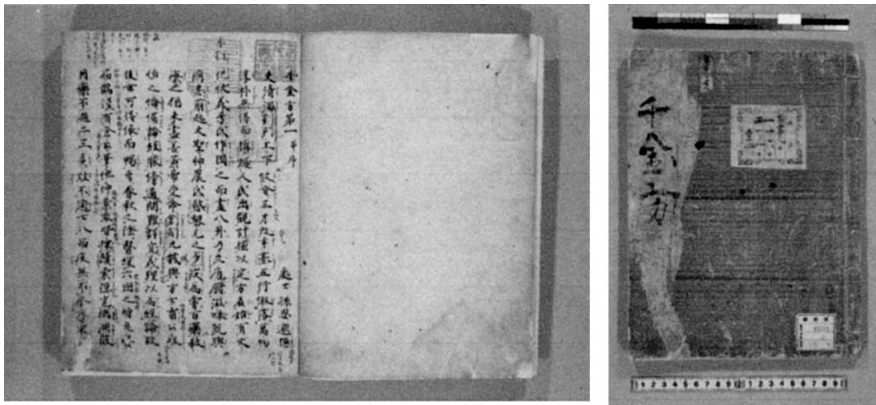


図1 『千金方』——遣唐使将来本

室町時代鈔本といわれる。吉田宗恂(1558~1610)の蔵書印「吉氏家蔵」が見られる。并序は、縦20字、横10文字詰めである。

21.7cm(図1)の大ききで、現在、宮内庁書陵部(五五八函九号)に所蔵されている。縦の長さは唐大尺(29.2cm)とほぼ一致する。この唐大尺が正倉院の大宝二年(707)作成の戸籍、中倉の「色麻紙」,「吹絵紙」でも紙の縦の長さに用いられていることを富谷至は指摘している<sup>7),8)</sup>。この縦の大ききは、千金方オリジナルの大ききに由来するものと考えられた。

『千金方』——遣唐使将来本は第一巻のみが現存している。『千金方』——遣唐使将来本には、巻末に多数の識語があり、それらより正和四年(1315)の和氣嗣成手抄本に基づき、建治三年(1277)の和氣仲景抄本で校訂され、永正から天正三年(1575)まで和氣(半井)家にあって伝承・抄写されてきたとされる<sup>2),10)</sup>。二カ所を除きこの識語における花押は、『千金方』——遣唐使将来本に貼られており、切り抜かれて貼付されたものと考えられる。識語の最後には「天正三年(1575)三月二日一見了 和末葉明雅」とあり、この部分には花押が貼付されず、直接書かれていた。このことを考えると、現存する『千金方』——遣唐使将来本を抄写したのは明雅であると推定された。岩井祐泉は『千金方』——遣唐使将来本を和氣嗣成が書き写したのとしている<sup>15)</sup>が、難波恒雄は今回の考察と同じ結果である天正三年(1575)に書き写されたものとしている<sup>9)</sup>。康正二年(1456)六月十七日の部分にも花押が見られないが、「以

家説授弘景畢。大膳権大夫」の部分の花押が反対に映った像が見られた。その他の花押が貼られた部分の対する頁には反対に映った像が見られ、これらは花押が書かれてすぐ切り取られ添付されたため映った像であると考えられた。

序文右上に吉田宗恂(1558~1610)の蔵書印「吉氏家蔵」の陰刻印記(図1)があるので、天正三年以降に吉田家へ所蔵が移った<sup>5)</sup>。慶長十二年(1607)に林道春を長崎に使わし、家康は本草綱目を取り寄せて(慶長十八年江戸に送られる)片山与安、吉田宗恂などにその内容を講義させ、また、宗恂の蔵書から『奇効良方』『千金方』『和剂方』なども講義させている<sup>11)</sup>。したがって、この宋改を経ない『千金方』——遣唐使将来本も講義した可能性がある。江戸幕府の書物奉行であった近藤重蔵の『好書故事』(1826)巻五四書籍四に「吉田家譜に宗皓慶長十五戌年家督して意安と改め直に御側に奉仕云々此節駿府に居宅の地を賜い、父法印宗恂の遺物献すべしと仰出されしかば、東照宮に杜氏通典一部奇効良方一部、台徳院殿に千金方一部を献ず(重守按ニ寛永系図伝ニ此事見ヘズ)」とある。十五戌は、慶長十五年(1611)のことであり、台徳院は秀忠のことである。吉田宗恂の死後、秀忠に千金方の一部が献上されたことが判る<sup>12)</sup>。この『千金方』——遣唐使将来本は江戸時代いったん、失われていた。文政年間、書肆、英平吉が錢二百文にて、購入。多紀菫庭(元

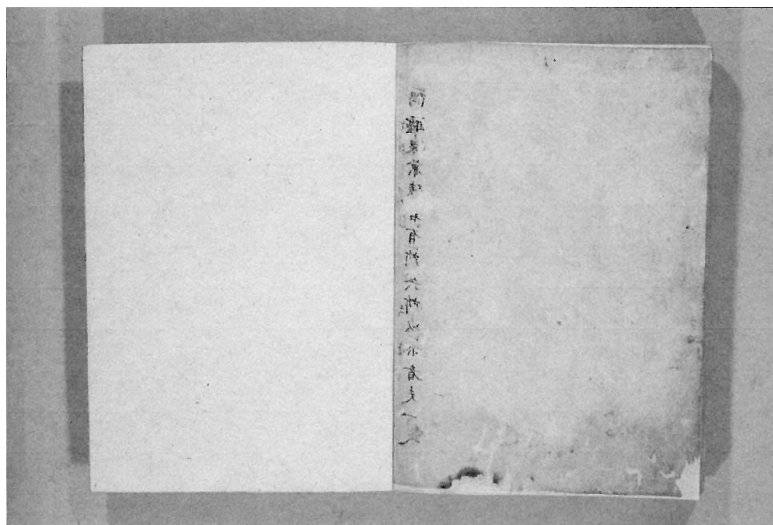


図2 『千金方』——遣唐使将来本の最終頁

薄い紙が裏表逆さまに貼り付けてあり，鏡文字のようにみえる。

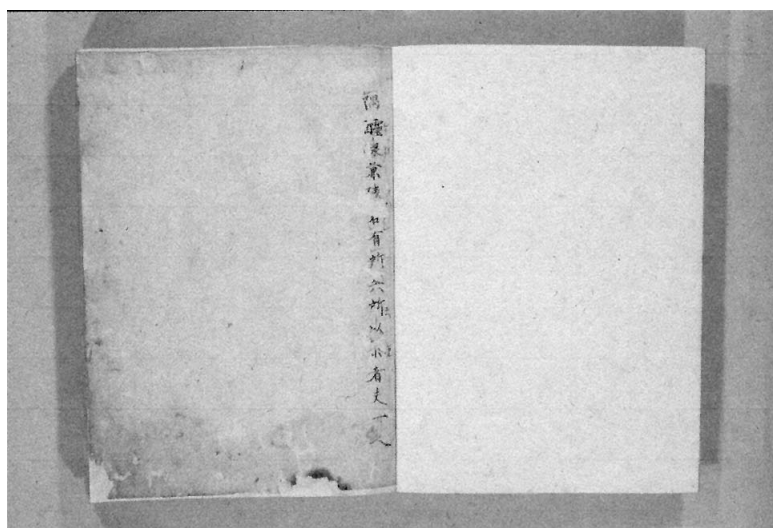


図3 反転した図

「隅醜兼陳若有所失所以余者夫一人向」と右隅に書かれてある。

堅)に販売し多紀氏聿修堂所蔵本となった。

『千金方』——遣唐使将来本の現存するのは第一巻だけであるが，今本とは一致せず『医心方』の引く『千金方』と一々物合するので，昔遣唐使が持ち帰ったものであろうと多紀元堅は述べている<sup>10)</sup>。この『千金方』——遣唐使将来本は，天保三年壬辰(1832)に模刻され，原本のごとくオコト点を朱印され，松本幸彦により『真本千金方』

と題して影印刊行された<sup>13),14)</sup>。

今回指摘された薄い紙が裏表逆貼られた部分(図2)はこの『真本千金方』の中には，含まれていなかった<sup>9)</sup>。また，近年，オリエント出版より影書が出版されたが，この本にも図2は含まれていなかった<sup>6)</sup>。

『千金方』——遣唐使将来本の特徴として，文字は薄い和紙の上に書かれており，それが厚い紙の

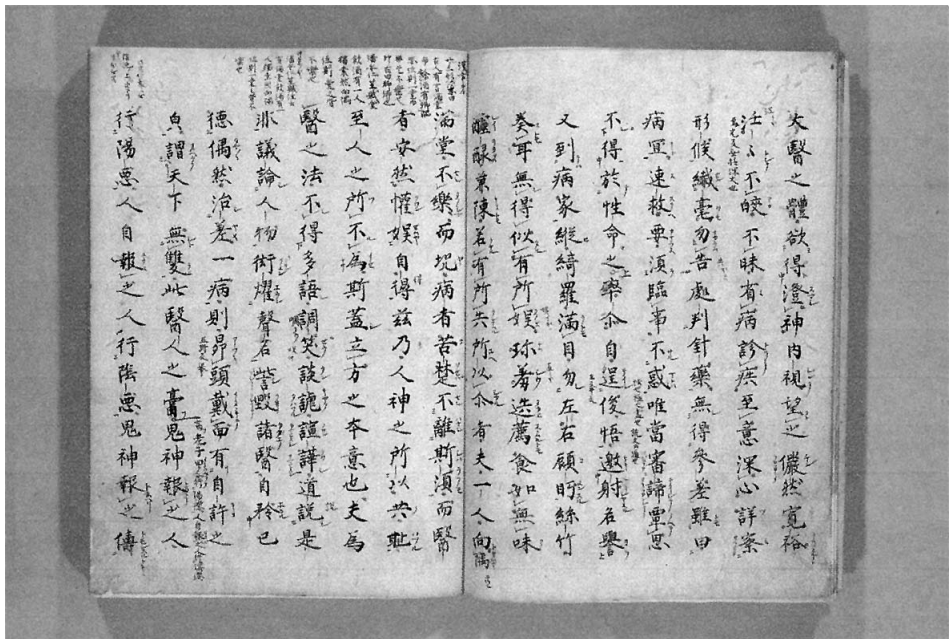


図4 鏡文字に相当する本文頁

「醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向隅」と記載されている。

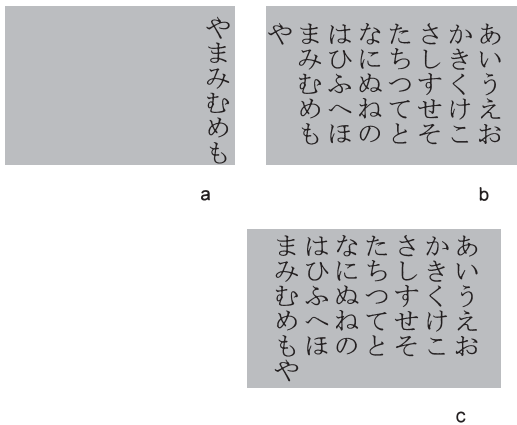


図5a, b, c

図5aの様に間違えるためには、図5cではなく、図5bの形態でなければ、2回のミスが必要となる。これは考えにくい。本来『千金方』——遣唐使将来本は図5bの形態であったものと考えられる。

- a 鏡文字の部分を模式化したもの
- b 鏡文字の最初の文字が一番上と考えたときを模式化したもの
- c 現状の『千金方』——遣唐使将来本を模式化したもの

上に貼られる形で、製本され書の形態をなしている。図2の部分は、薄い和紙が表裏逆に貼り付けられており、一見、鏡文字のように見える。この鏡文字となった部分を反転(図3)すると、「隅

醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向隅」と書かれている。この部分は『千金方』——遣唐使将来本の并序(図4)に相当し、「醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向隅」と記載されている。

『千金方』——遣唐使将来本の并序は、縦20字、横10文字詰めである。しかし、本文は縦16文字横8文字詰めとなっており、鏡文字に相当する『千金方』——遣唐使将来本における文の頁は、縦16文字、横8文字詰めである。ただ、この行だけは本文は遣唐使将来本の中では17字詰めとなっている。この17字詰めの頁を模式化すると、図5cのようになる。一方、鏡文字の頁では、「隅」の字が鏡文字では書かれており、引き続いて「醜醜兼陳若有所失所以余者夫一人向隅」と書かれている。これを模式化すると図5aのようになる。通常、本文を書いてある通り文字を書き写すが、正確に紙を汚さず抄写するにあたっては、右利きならば、左隅から写していくことがもっとも効率が良い。これを誤って左隅に写すところを右隅から写してしまったものと考えられる。模式図5aの形に間違うには、図5b、図5cのどちらの形から間違っていたであろうか。「隅」が一番上でな



図6 『新雕孫真人千金方』

鏡文字に相当する頁。「醜□□□所失所以爾者夫一人向隅」と記載されている。

ければ、このような書き間違えは起こりにくい。もし、そうであれば、左から写すところをうっかり、右下から書き始めて、二字目の「醜」からさらに、またうっかり、左上から書き始めたということになるが、これは、考えにくい。つまり、「隅」の字は、本来、一字のみ左上にあった可能性がある。つまり、図5bの形であったであろうと推定された。『新雕孫真人千金方』(図6)では、「醜□□□所失所以爾者夫一人向隅」と記載されている。2つの宋改を経ている『千金方』を校勘すると、「隅」の字は本文にもともと存在していたことが解る。つまり、『千金方』——遣唐使将来本は通常とられる方向から写すことはせず、初めから写すことを目的に左側より書写されていたことが推定できる。ただ、「隅」の字は、本来、一字のみ左上にあったと考えると、縦16字詰め、横9字詰めとなり字詰めがそろっていなかったことになる。

字詰めがそろっていない部位は『千金方』——

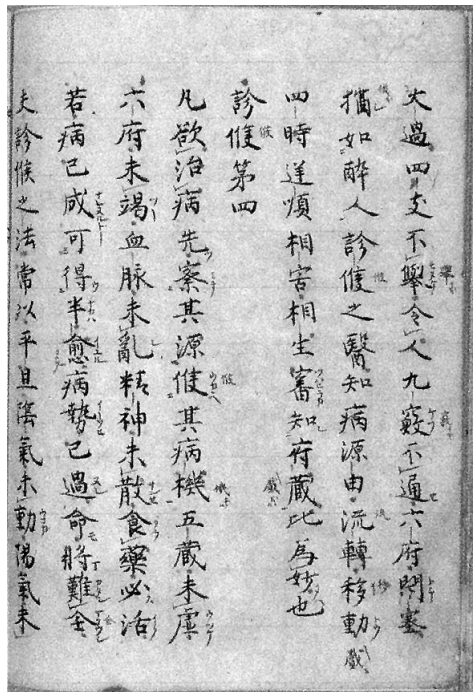


図7 『千金方』——遣唐使将来本の不揃いの部分  
2行目に17字詰めの場所が見られる。



図8 『新雕孫真人千金方』

図7に相当する頁。この頁には、「戲」の文字が見られない。

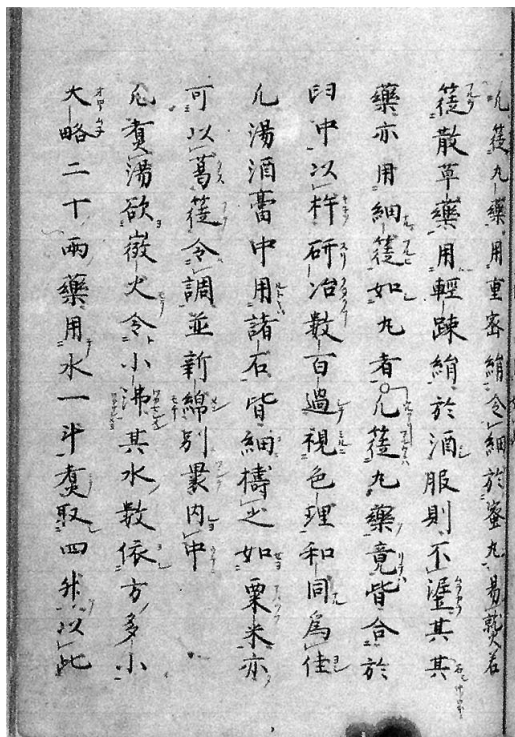


図9 『千金方』——遣唐使将来本

「穴アリ」と記入がされている。

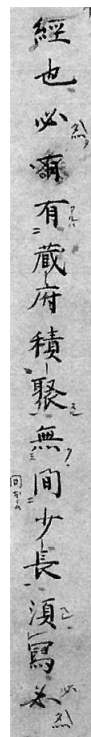


図10 『千金方』——遣唐使将来本

有の文字に×が記入されている。

遣唐使将来本には、他にも縦17字詰めの部分(図7の2行目)を認める。この17字詰めの場所の文字“戲”は、『新雕孫真人千金方』(図8)では見られない文字である。この文字の筆跡は本文とは異なる筆跡のため後から足されたものであるかもしれないと考えられた。また、『千金方』——遣唐使将来本の字詰めについて検討すると、基本的に本文では縦16文字、横8字詰めの形態は保たれているが、生薬の説明の項では一段小さくなった小文字で二行に渡って生薬の説明がなされている。『孫真人千金方』では、見出しがつき、『千金方』——遣唐使将来本と同様に生薬に対し一段小さな文字で二行に渡って生薬の説明がなされている。図9の頁には、「穴アリ」との記述があり、図10の頁には、有の文字に×を入れた部分が見られた。この有に×を重ねた部分の行は16行であり、この文字を入れないと縦の行数が合わなくなる。『新雕孫真人千金方』には、『千金方』——遣唐使将来本にみられない圏点がみられる(図

11)。『千金方』——遣唐使将来本では『新雕孫真人千金方』の圏点がある所が行の頭にくる。『新雕孫真人千金方』では、文字を詰めて掲載するため、この圏点がおかれたものと考えられた。こういった点より、千金方の草稿本に近い本をそのままに書写した可能性あるものと考えられた。また、できるだけそのままの状態で、遣唐使将来本を残そうとしていた意図がみられると考えられた。

## 総 括

『千金方』——遣唐使将来本は通常とられる順方向から写すことはせず、初めから写し遺すことを目的に左上側より書写されていたことが判明した。遣唐使将来本の書写はできるだけ本来の形を遺そうとして、現存の遣唐使将来本が残ったものと考えられた。

本論文の要旨は福岡医師漢方研究会(福岡, 2007年9月)にて報告した。

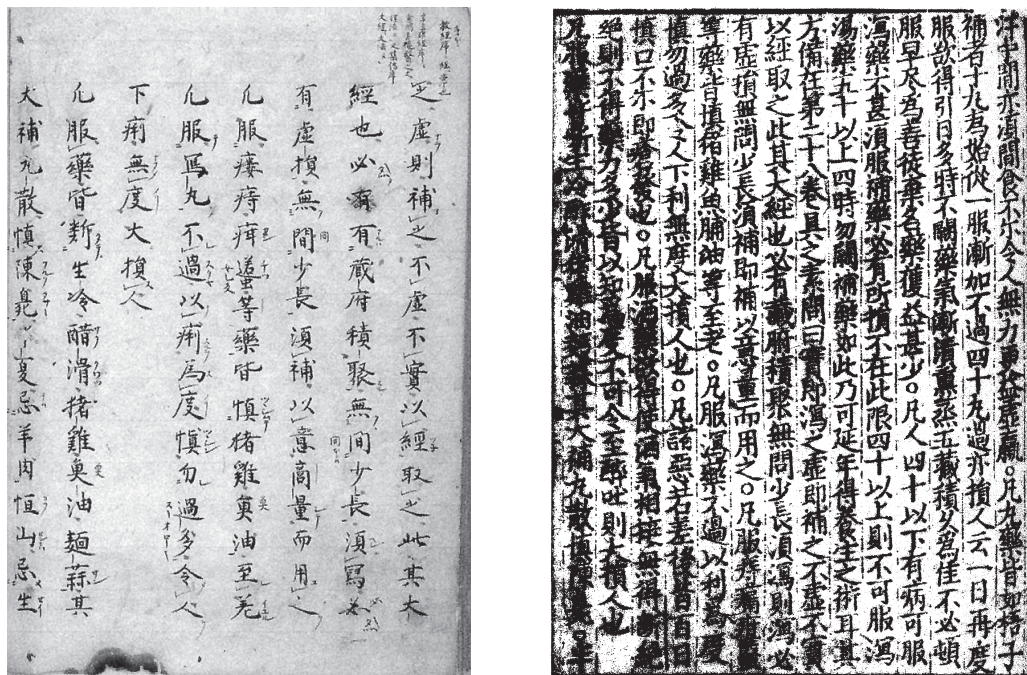


図11 『千金方』——遣唐使将来本と『新雕孫真人千金方』

『千金方』——遣唐使将来本には圈点は見られないが、『新雕孫真人千金方』には圈点が見られ、『千金方』——遣唐使将来本では圈点に相当する部分が行の上に来ている。また、『新雕孫真人千金方』には、『千金方』——遣唐使将来本にみられない条文の追加がみられる。

## 謝 辞

『千金方』の調査において高知大学医学部医学科言語分析学 阿部眞司教授、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部 小曾戸洋先生には御世話になりました。感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 松岡尚則, 山下幸一, 村崎徹「千金方における量字についての考察」『日本医史学雑誌』第52巻, 199-210頁, 2006.
- 2) 真柳誠, 小曾戸洋「目で見える漢方史料館(108)——宮内庁書陵部所蔵の古鈔本『千金方』——遣唐使将来本による唐代旧態本」『漢方の臨床』第44巻, 562-654頁, 1997.
- 3) Л.Н.МЕНЬШИКОВ: ОПИСАНИЕ КИТАЙСКОЙ ЧАСТИ КОЛЛЕКЦИИ ИЗ ХАРА-ХОТО (ФОНД П. К.Козлова), АКАДЕМИЯ НАУК СССР (1984).
- 4) 李繼昌「列寧格勒藏「孫真人千金方」殘卷考察」『敦煌學輯刊』119-122頁, 1988.
- 5) 真柳誠, 小曾戸洋「目で見える漢方史料館(115) 宋

- 改を経ない『千金方』の古版本二種」『漢方の臨床』第44巻, 1514-1516頁, 1997.
- 6) 孫思邈『新雕孫真人千金方 宋版；真本千金方古鈔本』オリエント出版社, 大阪, 1989.
  - 7) 狩谷核斎著, 富谷至 校, 『本朝度量權衡攷』, 平凡社, 東京, 277頁, 1992.
  - 8) 湯原公浩編『別冊太陽 日本のこころ 143 正倉院の世界』, 平凡社, 東京, 2006.
  - 9) 松岡定庵『千金方薬註 付 真本千金方』医聖社, 東京, 1982.
  - 10) 宮下三郎「日本にきた孫思邈」『千金方研究資料集』オリエント出版, 大阪, 1989.
  - 11) 土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』戸田書店, 清水, 1973.
  - 12) 『近藤正齋全集』第三, 国書刊行会, 東京, 182頁, 1906.
  - 13) 大塚恭男「『千金方』について」『漢方の臨床』第18巻, 303-316頁, 1971.
  - 14) 小曾戸洋『中国医学古典と日本——書誌と伝承』塙書房, 東京, 1996.
  - 15) 岡田研吉, 牧角和宏, 小高修司『宋以前傷寒論考』東洋学術出版社, 千葉, 2007.

## Concerning the Writing of Senkinho (QianJinFang) Kentoshi-syoraibon (a Book of the Japanese Envoy to the Tang Dynasty of China)

Takanori MATSUOKA<sup>1)</sup>, Koichi YAMASHITA<sup>2)</sup>  
Hideki KURIBAYASHI<sup>3)</sup>, Kazuhiro MAKIZUMI<sup>4)</sup>  
Hidetoshi YAMAGUCHI<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Surgery, Shizuoka Children's Hospital

<sup>2)</sup>Department of Anesthesiology and Critical Care medicine, Kochi Medical School, Kochi University

<sup>3)</sup>Koshigaya Ohbukuro Clinic, <sup>4)</sup>Makizumi Internal Medicine Clinic

<sup>5)</sup>Kowa Acupuncture and Moxibustion Clinic, Sinshu Institute of Alternative Medicine and Welfare

In the Senkinho existed in the imperial household agency of Japan, there was a page in which mirror image letters were written. In analyzing these mirror image letters, this book was copied from the left side. There is a possibility that the Senkinho-kentoshisyoraibon was copied from a manuscript which was close to the original version of the book.

**Key words:** Senkinho, Senkinho-kentoshisyoraibon, Alteration in the north Sung dynasty China, Copy